

2026年2月25日

報道機関 各位

展示設計で学びが変わる ～「感じる・考える・語りたくなる」S-S-Sモデルを提案～

【本研究のポイント】

- ・展示設計が来館者の学びと日常生活や社会とをつなげられるか検証。
- ・木曾馬^{注1)}の標本資料を使って、来館者の理解や意識の変化を明らかにした。
- ・感覚体験(Sense)—科学的理解(Science)—価値の意味づけ(Significance)を段階的につなぐ教育モデル「S-S-Sモデル」を実践にもとづき体系化。

【研究概要】

名古屋大学博物館の梅村 綾子 特任助教は、岐阜大学高等研究院の高須 正規 准教授とともに、博物館における学びを段階的かつ意図的に深める教育フレームワーク「感覚体験(Sense)→科学的理解(Science)→価値の意味づけ(Significance) <S-S-Sモデル>」を、実践にもとづき体系化しました。

博物館は、文化や自然遺産を「知る」場であると同時に、来館者がそれらを自分自身の問題として「考える」場でもあります。しかし、木曾馬をテーマとした企画展^{①注2)}の来館者調査から、文化や歴史の象徴として認知される一方で、日常生活や社会との関わりの中では自分事として結びつきにくいことが明らかになりました。

そこで企画展^{②注3)}では、触覚(蹄の模型)、嗅覚(馬糞のにおい)、聴覚(馬市の音)など多感覚体験(Sense)を起点とし、木曾馬に関する文化的・社会的・環境的な問いや解説(Science)を段階的に提示しました。さらに、「木曾馬のどのような点を、誰かに伝えたいと思いましたか」といった問いかけを通じて、来館者が展示体験を振り返り、その意味を自らの言葉として表現(Significance)する機会を設けました。その結果、来館者は展示を受動的に鑑賞するだけでなく、木曾馬の価値や保存の意義を整理し、他者に伝えることを意識した反応を示しました。

この教育モデルは木曾馬に限らず、博物館における人と遺産、社会をつなぐための実践的で汎用性の高い教育モデルとして期待されます。名古屋大学博物館学生運営スタッフ MusaForum^{注4)}と実施している展示・イベント企画でも活用されています。

本研究成果は、2026年2月16日付の国際学術誌『Journal of Museum Education』オンライン版に掲載されました。

【研究背景と内容】

博物館は、文化や自然遺産を社会に伝える重要な役割を担っています。しかし、展示が来館者にどのように受け止められ、日常生活や社会の中でどのように活用されているかは、十分に明らかになっていません。

本研究では、こうした課題への取り組み手法を、木曾馬をテーマとした企画展で実践しました。本州唯一の日本在来馬である木曾馬は、文化や歴史を象徴する存在であるとともに、保存と活用が社会的にも重要課題となっています。

名古屋大学博物館で開催された企画展①(会期:2022年10月11日~2023年5月6日)では、木曾馬の展示コーナーを設け、展示期間中に「木曾馬とはどのような馬か」という問いを設定し、88名の来場者から自由記述による回答を収集しました。

さらに、得られた回答をテキスト分析し、その結果をもとに対話型企画を実施して(実施日:2023年4月29日)21名の参加者から追加の意見を収集しました。分析の結果、木曾馬は文化や歴史を象徴する存在として広く認知されていることが分かりました。一方で、多くの来館者は木曾馬を「特別で非日常的な存在」と捉え、日常生活や社会との関わりに結びつけにくいことも明らかになりました。この結果は、展示の工夫によって、来館者の理解を日常生活や社会との関係へと広げ得ることを示唆しています。

そこで企画展②(会期:2024年4月22日~5月12日、場所:木曾町文化交流センター)では、触覚(蹄の模型)、嗅覚(馬糞のにおい)、聴覚(馬市の音)などの多感覚体験(Sense)を起点とし、文化的・社会的・環境的な問いや解説(Science)を組み合わせることで、来館者が木曾馬の多面的な価値を主体的に理解して意味づけできるよう導く(Significance)展示構成としました(表1)。さらに、来館者同士でその理解を共有するプロセスを意図的に組み込みました。

Significanceの段階として、「木曾馬のどのような点を、誰かに伝えたいと思いましたか」といった問いかけや解説を通じて、来館者が自ら意味を考え、言葉にする機会を設けました。その結果、来館者の多くが、木曾馬の保存や継承の難しさやその価値に言及するとともに、「この展示をまず見てほしい」といった展示体験の共有を促す記述や、「木曾馬を知ることによって地域の歴史が分かる」といった意味づけを伴う記述を示しました。これらの反応は、展示体験によって得られた個人的な印象が、他者と共有可能な意味や語りへと変化したことを示しています。

【成果の意義】

本研究では、これらの実践と成果を、感覚体験(Sense)→科学的理解(Science)→価値の意味づけ(Significance)へと至る三段階を意図的につなぐ教育フレームワーク「Sense-Science-Significance(S-S-S)モデル」として、体系化しました(図1)。

このS-S-Sモデルは木曾馬に限らず、地域の文化財や自然史標本、環境問題など幅広いテーマに応用可能です。博物館における人と遺産、社会をつなぐ教育モデルとして、実践的かつ汎用性の高いアプローチとなることが期待されます。実際に、名古屋大学博物館学生運営スタッフ MusaForum と実施している博物館の展示・イベント企画でも活用されています。

Press Release

本研究は、2023 年度から始まった JSPS 科研費 JP23K02763 の支援のもとで行われたものです。

項目	企画展①	企画展②
会期 会場	2022年10月22日～2023年5月6日 名古屋大学博物館(愛知県名古屋市)	2024年4月22日～2024年5月12日 木曾町文化交流センター(長野県木曾郡木曾町)
展示の軸	視覚情報・解説中心	多感覚体験ごとに問いの投げかけ
主な展示物	骨格標本(さわれない)  	さわれる模型  ・におい  ・音  
来館者の反応	歴史・文化としての理解	歴史・文化としての理解に加え、 自分事としての意味づけ

表 1. 企画展①と企画展②の比較

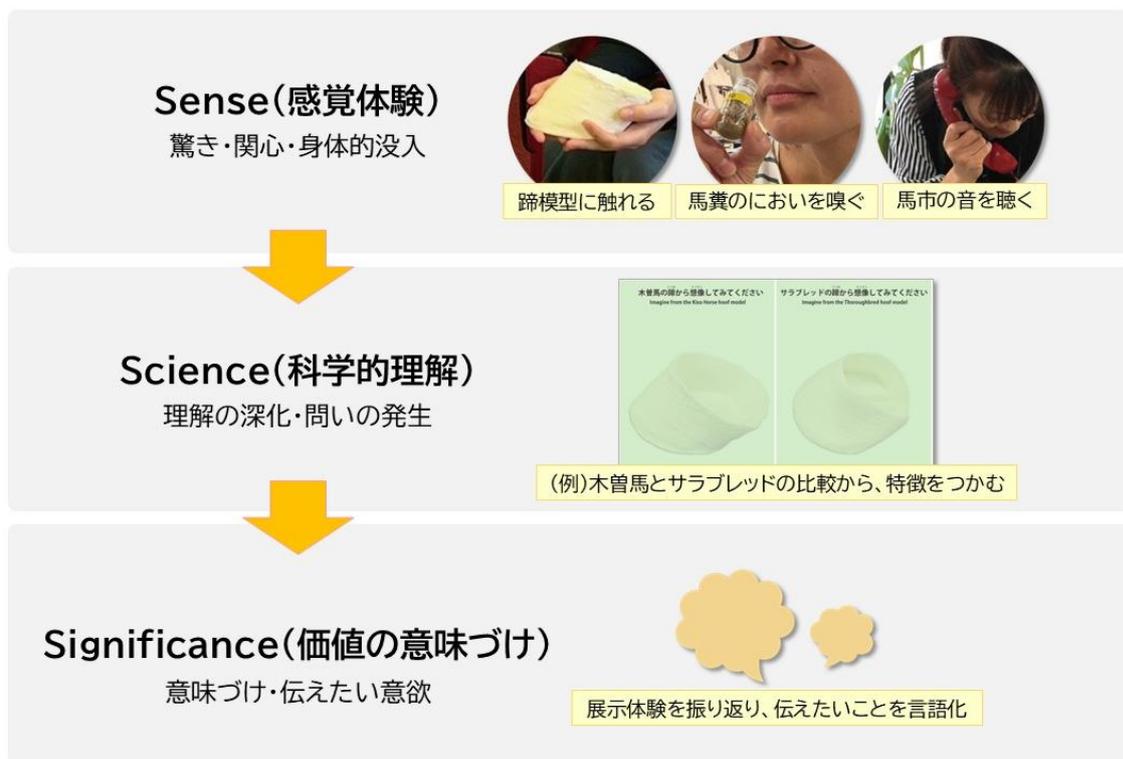


図 1. 実践にもとづき体系化された、Sense-Science-Significance モデル

【用語説明】

注 1)木曾馬:

本州唯一の日本在来馬であり、文化的・歴史的価値が高いことから、保存と活用のあり方が社会的課題となっている。在来系統を代表する個体として知られる「第三春山号」は、約 700 頭の子孫を残し、木曾馬の保存に大きく貢献した。その骨格標本は名古屋大学博物館に、剥製標本は開田郷土館に収蔵されている。

注 2)企画展①:

名古屋大学博物館第 29 回特別展「岐阜大・名古屋大 博物館コラボ展」(会期: 2022 年 10 月 11 日~2023 年 5 月 6 日、会場:名古屋大学博物館)の一角で、木曾馬に関する展示を行った。会期中、「木曾馬とは何か?」という問いを設定し、来館者から自由記述による回答(88 名)を収集した。さらに、その結果をもとに、市民参加の対話型イベント「木曾馬とともに生きる楽しみを考えてみよう」(2023 年 4 月 29 日開催)を実施した。

注 3)企画展②:

2024 年 4 月 22 日から 5 月 12 日まで、木曾町文化交流センターにおいて、名古屋大学博物館出張企画展「木曾馬とはどんな馬なのか」(共催:木曾町、後援:木曾町教育委員会)を開催。展示期間中には任意回答によるアンケート調査を実施し、75 名の回答を収集した。

注 4)名古屋大学博物館学生運営スタッフ MusaForum:

2020 年 4 月に設立された、名古屋大学博物館を拠点とする学生運営スタッフ団体。2026 年 1 月現在、現役 229 名(累計 358 名)が在籍し、名古屋大学および他大学の多様な専門分野をもつ学生が参画している。博物館を拠点に、地域と連携しながら、さまざまなテーマの展示・イベント企画を企画・運営している。

【論文情報】

雑誌名:Journal of Museum Education

論文タイトル:Sense-Science-Significance Model: A Museum Education Framework for Engaging Visitors with Cultural Heritage

著者: 梅村綾子(名古屋大学博物館)、高須正規(岐阜大学高等研究院)

DOI: 10.1080/10598650.2026.2619268

URL:

<https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/10598650.2026.2619268>



東海国立大学機構は、岐阜大学と名古屋大学を運営する国立大学法人です。
国際的な競争力向上と地域創生への貢献を両輪とした発展を目指します。

東海国立大学機構 HP <https://www.thers.ac.jp/>

